

花みずきの木の下で

桜田 靖

序 文

この物語の舞台は、風光明媚な湘南の鵠沼海岸に近い住宅街です。照男と夢佳と美雪は向う三軒両隣で育った仲良し三人組。だが、高校生の年代になったら、自然に男と女を否応なく意識してしまうもの。照男をめぐり夢佳と美雪の間に葛藤が生じたのはいたしかたのないことでした。しかし、そんな真剣な心も思春期が過ぎれば、淡淡と消え去ってしまふものです。そんな他愛もないお話です。

花みずきの花の部分は小さい。その苞葉が
花弁さながらなので、人は全体を花みずきの
花と見ている。思春期という大人になりかけ
の時代もそうではないのか。若者は青春との
区分がつかないまま、その時期を過ごし、し
まうようである。

「テル坊！今、何考えてるん？」

夢佳の細い眉が曇っている。テル坊こと照
男の隣家に住む同じ県立高校に通ったガール
フレンド、否、この正月に二人は親の目を盗
んで男と女の関係を結んでいた。恒例で父母
は鎌倉の八幡宮へ初詣に出かけて留守だった。
た。自分らは後でお参りに行くから、と二人
は照男の部屋にこもったのだ。真ん前の家に
住む、もう一人のガールフレンドの美雪は一
家揃って父親の里の秋田へ年末年始の帰省を
していた。照男と夢佳は、親の祝い酒の残り
を部屋に持ち込んでいた。一つのコップで一杯
また一杯と交代で飲んで、二人は酒酔いで

ばせてしまい眠気でカーペットに横たわった。遂に朧々になって、いつの間にか夢佳が照男を馬乗りに組み敷いていた。それで彼のオスの本能が目覚めたのだ。

「別に：美雪、もう来ても良い頃だね」と照男が仏頂面をした途端、夢佳の切れ長の眼がカツと見開いた。先月高校を卒業して金髪に染めた顔立ちはずっかり大人びて見えた。湘南地方、藤沢郊外の鵠沼の公園ではとつくに梅の開花は終り、白蓮と木蓮の花季も過ぎ、長雨と冷温に耐えた桜花も散って、晴天の二人の頭上には薄紅と純白の花みずきの花が咲いていた。遠くには鵠沼海岸の松林の緑が霞み、道端には小さなスミレの花が清明の空を仰いでいた。

「テル坊！美雪の方が好きだなんて言わせないからね」

美雪はこの春にミッション系の高校を卒業し、都心にあるお嬢様女子大の入学式を待つ身だった。照男も八王子のマンモス大学の入

学式を明日に控えていた。一人夢佳だけ進学しないので、この四月初めから鎌倉にある伯父の蕎麦屋で働いていた。今日は伯父の許しをもらって午後から店を抜け、携帯で照男と美雪を呼び出したのだ。三人は幼馴染で中学までは同じ学校へ通った。共にサラリーマン家庭で、家族ぐるみの付き合いの中で育った。高校生になったら思春期という年頃のせいにか、無邪気さが消えて、三すくみのように意識し合う有様となった。照男は内心、聡明で清楚な美雪の方が好きだった。夢佳は睫毛が長く目力のある女の子で、おとなしい美雪を自分に隷従させている様相もあった。夢佳は幼い頃から隣家のイケメンの照男が好きでたまらず、大人になったら二人は結ばれる運命にあるのだ、と決意を秘めていた。だが、照男はそんな勝気な性格の夢佳を前から苦手に思っていた。高校生になって、三人の関係が振じれた。照男と夢佳は同じ県立高校に通い、クラブ活動もテニス部と一緒にだった。い

つもベタベタと密着した様子で、他の部員達からも二人は恋愛状態にあると公認された感じだった。一方、大学進学予定の照男と美雪は藤沢市内の同じ学習塾に通っていて、塾帰りの夜道を同道する日々を送った。そんな二人はいつか真直ぐに帰宅することなく、自宅に近い町角の小さな公園の花みずきの木の下にベンチに座り、他愛もない学校での出来事をヒソヒソと喋り合い、笑い合う愉楽の時間を過ごしていた。街灯の明りで見る美雪の顔は凄絶に白く、照男は何度も彼女を抱き締め唇を奪ってみたい欲望に襲われた。そんな夏休みのある夜、塾帰りの照男と美雪が肩と肩を密着させ、火照った頬を寄せ合っている最中に、いきなり夢佳が目の前に立ったのだ。女特有の勘でこの場を探り当てたのだろうか。美雪は蛇に睨まれた蛙さながら、身を離すと黙って俯いた。照男は、こんな時間に何だ、と開き直ったが、美雪の方が早々に降参して、もう三人一緒にしか会わないと哀れっ

ぽく不公平な約束をした。夢佳は、しょっちゅう学校で照男と一緒に過ごしているのにいい気なものだった。それから三人の集場所が、何となくこの花みずきの木の下になった。ジュースやスナック菓子を持ち寄って単にお喋りをして時を過ごした。皆が黙り込むと、公園脇の小川のせせらぎの音に耳を傾けた。そんな瞬間は滅多になかった。大抵夢佳が甲高い声で喋り、誰も笑わなくても自分一人で笑い、美雪のマシユマロのような白い腕の肌をつねりながら、照男の身体に甘えるように寄りかかって眼を瞑った。おとなしい美雪は、夢佳の恋の勝者のような振る舞いが不愉快だったが、幼い頃からの友情を思って耐えていた。その夏の夜の出来事の後からは、仕方なく照男と美雪は離ればなれに塾の帰路を辿っていた。美雪は塾帰りの民家の植え込みの暗闇に、夢佳の鬼火のような瞳を幻視して怯えるように、俯き加減で早足に家路を急いでいた。

去年のある晩秋の夕暮れのことだった。この公園の花みずきの木は紅葉し赤い実をつけていた。辺りの杉の暗い緑の合間には彩りを増した黄色いイチヨウや赤茶けた柿や紅のツツジの葉っぱが、折からの西日を浴びて湘南の町角を荘厳に染め抜いていた。だが、照男と美雪の頭の中では、明くる年の大学受験のことが木枯しのように吹き荒れていた。それは早々に伯父の蕎麦屋で働くことに決めている夢佳には思いもつかないことだ。彼女が何か意を決して照男と美雪をここに呼び出したのは、吊り上った切れ長の目の色が物語っていた。――約束、破ったわね。美雪！――

案の定、照男に自分と美雪のどっちが好きなのか、今ここで即答せよ、と詰め寄ったのだ。つぶらな瞳の美雪は横を向いて黙りこんだ。照男は不意の詰問に一瞬目線が宙を泳ぎ、これまで通り三人仲良くすればいいじゃないか、夢佳は今流行の肉食系女子なのか、

と反駁した。だがこの日の夢佳の女の魂は花
みずきの実のように真っ赤に燃えて焼けてい
た。実は昨晚、夢佳は照男と美雪が塾から出
たのを尾行したのだった。鵠沼海岸駅からそ
れぞれの自宅まで歩いて十五分の住宅街の帰
り道、行き交う人は滅多にいない。ある曲り
角で、美雪は後ろから付かず離れず歩いて来
る照男を待った。彼女は、照ちゃんと呼びか
けると彼の肩に抱きつき、嫉妬深い夢佳が怖
い、と囁いて照男に縋り付き涙をポロポロこ
ぼした。実際、楚々と物静かな美雪の方が好
きだった照男は当然のごとく唇を合わせる
と、彼女の小さな肩と細い腰を抱き寄せて、
そのまま陶然と動かなかった。夢佳が、その
一部始終を角の暗がりから凝視していたと
は、まさに知らぬが仏というものだ。照
男と夢佳が言い争ううちに尾行の真相が顕わ
になり、これには平素から温和な美雪も色を
なして夢佳に喰ってかかった。夢佳も血相を
変えて、自分は美雪に駆けつこでも鬼ごっこ

でも指相撲でも、一度だって負けた覚えがない。何なら今力づくでやっつけてやる、と人目がないのを幸いに甲高い声で喚いた。ここまで言われたら、いつもの美雪なら悄然とギブアップして当たり前だったけど、その時の彼女は別人のように強気だった。夏に水泳の合宿の筋トレで鍛えたから自分も腕づくでは負けない、と応酬して対峙するように夢佳の前で腕まくりをしたのだ。勝気な夢佳も思わぬ展開に切れ長の目を見開き、たじろいで一、二歩と後退した位だったが、照男の方はもつと仰天し、あわてて二人の間に分けて入り、来春に花みずきが咲いたら、この花の下でどちらが好きかをはっきり告げるから、それまで待ってくれ、とその修羅場を収めたのだった。美雪には、照男と夢佳が先の正月の祝い酒で酔っ払った勢いで結ばれていたなんて知るよしもない。

「テル坊、近頃わたしの体、ちょっと変調なんだからね。時々吐き気もあるし、男の責任

を取ってよ。お父さんとお母さんにきちんと挨拶してね」

「そんなこと、医者で調べてもらったのかよ。たった一回のあれで子供が出来るもんかよ？」

照男は、美雪が現れる前にことを有利に図ろうとする、夢佳の底意地の悪さに辟易として答えた。

「照ちゃん！夢佳！遅くなってごめん！だって駅前の本屋さんで大学のテキストを下調べしていたのよ」

そこへ、ようやく美雪が駆け寄って来た。セーラー服から紺のスーツ姿に変わった美雪の美貌は一段と磨きがかかり、スタイルの良

さで、いずれ何らかのミス女子大に選ばれそうな高貴さが見られた。

「美雪ったらポニーテールにしたの。とっても似合うわよ。春になったら本当に綺麗になったね」

夢佳は臆面もなく恋のライバルを誉めた。

密かに照男を寝盗っていた余裕のなせること
だろう。
「まあ、夢佳のカールした金髪、とっても素
敵よ。大人になったのねえ」とちらはお世
辞のようだった。
「腹減ったなあ。飯でも食おうよ」
照男は、夢佳と美雪のどちらが好きかを告
白する約束の日となつて、憂鬱極まりなかつ
た。
「テル坊、逃げちゃ駄目だったら。もう花みず
きが咲いているのよ。ここは三人の約束の場
所よ」
純白と薄紅の花みずきの花盛りの季節であ
る。
「ねえ、リンゴ食べない？ さつき駅のデパー
トで買って来たのよ」
照男を挟んで夢佳と美雪は傍らのベンチに
座った。ハンドバッグからナイフを取り出し
美雪は細い指でリンゴの皮を器用に剥いた。
「美雪ったら、ナイフ持ち歩いているの？」

夢佳の目の色には、照男の返答しだいによ
っては、逆上した美雪がナイフを振り回し、
血の雨でも降りそうな刃物沙汰の起きる不安
を宿していた。
「万能ナイフって便利なのよ。缶切りも栓抜
きも付いているの」
美雪はもの静かに微笑むと切り分けたリン
ゴを照男と夢佳に勧めた。
「わたし、来年の今頃はテル坊の赤ちゃん抱
いているかもよ」
夢佳はなおも勝ち誇ったように性悪を口に
したが、美雪は全く意に介せず、
「それって、おめでとう。わたしには大きな
夢があるの。大学を出たらアメリカに留学す
るわ。結婚なんて遠い先のことよ」
夢佳は肩すかしでも喰ったように啞然と言
葉を失った。
「薄紅色の花は夢佳だな。真っ白い花は美雪
だよ。どっちもいつまでも好きだからね」照
男がようやく重い口を開いた。三人は黙々と

甘酸っぱいリンゴの実を齧っていた。思春期
という時代がサクサクと音を立てて崩れ去っ
ていくのを三人がそれぞれに実感していた。
結局、夢佳は想像妊娠をしていただけだっ
た。花みずきの花の下に、夢佳が赤ん坊を抱
いて立つ姿も露と消えてしまった。

終